

【目次】

・世界に意識は一つである	[2ページ目]
・普遍的な目的はあるのか	[3ページ目]
・自己同一性について	[3ページ目]
・ありのままに見た「世界」とはどんな世界か？	[4ページ目]
・自説: 世界は意志の無限な闘争と創造の場である	[6ページ目]
・補足	[8ページ目]
・「世界は意志の無限な闘争と創造の場である」の意味	[12ページ目]
・補足2	[13ページ目]
・自分らしい生き方をするために	[15ページ目]
・補足3	[17ページ目]
・自説: 一者との合一は不可能である	[21ページ目]
・補足4	[22ページ目]
・真の人生の目的	[25ページ目]
・自説: 人生の3段階	[26ページ目]
・補足5	[26ページ目]
・相対主義 or 絶対的真理？について	[27ページ目]
・世界は存在せず、無数の意味の場だけが存在する	[28ページ目]

【世界に意識は一つである】

アメリカの物理学者デヴィッド・ボームが提唱した量子力学における「内在秩序と外材秩序」という概念。

内在秩序はホログラム的な性質がある。

『投影された宇宙—ホログラフィック・ユニヴァースへの招待』の著者マイケル・タルボット氏は、著作にて内在秩序と「ユングの集合的無意識」との関連性について指摘している。

アメリカの神経心理学者カール・プリブラムの脳ホログラフィー理論も著作にて紹介しており、脳は一種のホログラムであると書かれている。

ここである仮設が浮き上がってくる。

「世界に意識は一つなのではないか？」

我々個々の意識は、集合的無意識という一つの巨大な意識・大我から分裂した意識にすぎないのではないか？

この真相を確かめるべく、この仮説に近い哲学や概念がほかにも無いかどうか調べた。

●超弦理論のホログラフィック原理と、イギリスの数理論物理学者ロジャー・ペンローズ氏が提唱したツイスター理論は、関連付けられるとされている。

ツイスターホログラフィー

ロジャー・ペンローズ氏は、量子脳理論を提唱している。

●仏教思想の「空」という概念も「意識は一つ」という仮説に近いものと思われる。

唯識において「阿頼耶識」という概念があり、阿頼耶識においては俱有の種子によって阿頼耶識同士が繋がっているとされている。

この概念は集合的無意識と似ている。

●古代ギリシャ哲学において、プラトンの言う「イデア」も「善のイデア」という一つの巨大な意識ではないだろうか。

プロティノスは、プラトンのイデア論を継承しつつ、「一者」という概念を導入した。

●解離性同一性障害やイマジナリーフレンドと、集合的無意識との関連性を考えてみると、

個人の意識そのものが「集合精神(ハイブマインド)」的なものである可能性が見えてくる。

●日本の脳科学者、茂木健一郎氏は、著作『脳とクオリア』にて、物理的空間に対してツイスター空間が考えられるように、ニューロンのネットワークのダイナミックスを記述するのに適した相互作用を基本とする空間が考えられ、これが私たちの認識の時空となっている、という可能性を指摘している。

とすると、私たちの「心」は、ツイスター空間に対応する、ニューロンのネットワークのダイナミックスを記述する空間で生ずる表象から構成されていることになる、とも指摘している。

また、茂木健一郎氏は著作『クオリアと人工意識』にて、「この宇宙には意識は一つしかない」と説いている。

以上のような多数の証言から、私は「世界に意識は一つである」という確信に至った。

【普遍的な目的はあるのか】

仏教における目的は、業の解消による涅槃に至るための修行にある。

プラトンのイデア論で言うなら、元々天上界にいた魂が、煩惱により地上界に堕ちてきた。

その魂が輪廻転生を繰り返す中で、徳を積んでいき、天上界に帰還する。この天上界への帰還が目的となる。

一方、ドイツの哲学者アルトゥール・ショーペンハウアーは世界を「意志は究極の目的を欠いた無限の努力(闘争)である」と捉えた。

フランスの哲学者アンリ・ベルクソンは世界を「進化とは持続的な創造の推進である」と捉え、因果や目的の上で行われることなく、予測不能な飛躍による進化であり、創造的活動であるとした。

両者に共通することは「普遍的な目的はない」ということである。

【自己同一性について】

茂木健一郎氏は著作『クオリアと人工意識』にて、自己同一性について考える上で、アンリ・ベルクソンが提唱した「純粹記憶」が鍵になるのではないかと語っている。

【ありのままに見た「世界」とはどんな世界か？】

ありのままに見た「世界」

- ・宇宙:複数の銀河団やあらゆる天体の存在する時空間
- ・銀河団:多数の銀河が互いの重力の影響によって形成された銀河の集団
- ・銀河系:複数の惑星系や恒星を含む天体の集まり
- ・太陽系:太陽という恒星を中心とする惑星系
- ・地球:太陽系を構成する惑星の1つ
- ・国家:人間が自分自身の存在を維持するための共同体であり、システム
- ・人間:動物
- ・動物:他の生物を食べることにより自己保存を維持し、生殖行為により自己の分身を複製し、自己の複製もまた他の生物を食べることにより自己保存をし、その自己の複製もまた生殖行為により自己の分身を複製する、その永遠のサイクルを維持する存在
- ・食べる対象:他の動物、植物
- ・植物:光エネルギーと二酸化炭素を取り込むことにより自己保存を行い、生殖により自己の分身を複製する存在
- ・光エネルギーや二酸化炭素、生物を構成する物質:全て「素粒子」から構成されている
- ・素粒子:これ以上分割することのできない物質の最小単位

人間とは、人間という生物の存在を維持するために存在し、

国家とは、人間という存在を維持するための共同体でありシステムである。

ありのままに世界を見た時、生物とは「生物の存在を維持するための存在」であるといえ、

生物の存在を維持するために、他の生物を食べ、または外界からエネルギーを得ることで存在を維持する。

そこには、生態系という食物連鎖があり、全ては循環している。

物質→植物→動物→動物→物質

と、一周まわって再び物質に戻る。

その生態系の循環を維持している存在が「地球」そのものである。

地球は、太陽系に存在する複数の惑星との関係により、そして太陽のエネルギーによりその存在が維持されている。

もしかしたら、太陽も、銀河系に存在する複数の天体との関係性により存在が維持されているかもしれない。

もしかしたら、銀河系も銀河団という集団により銀河系自身の存在が維持されているかもしれない。

それら全ての存在が宇宙という時空間に存在する。

「存在の全ては『関係性』により、その存在が維持されている」
存在のすべては、その存在そのものを維持するために存在し、その存在を維持する力が「関係性」であり、その「関係性」は物理法則により成り立っている。

つまり、存在する存在にとっての目的は「存在すること」そのものが目的であり、存在するために存在し、存在を維持するために全ての行為が行われている、ということになる。

宇宙の目的は「存在」を生み出すことである。
存在を生み出すために、物理法則が存在し、
存在という秩序があるから、存在を壊す無秩序というものがある。
無秩序なくして秩序という存在は生み出せない。

全ては「存在」を生み出すために、世界は存在している。

我々人間は、人間という存在を維持するだけでなく、「文化」を創造している。
世界が「存在」を生み出すために、存在するのであれば、
人間という存在は「文化」という存在を生み出す、小さな「世界」そのものであるといえる。

つまり、人間とは「世界そのもの」である。
生物そのものも「世界そのもの」なのかもしれない。

つまり、『世界が世界を生み出し、世界は世界を生み出すために存在する』となる。

【自説：世界は意志の無限な闘争と創造の場である】

ショーペンハウアーは世界を、「意志は究極の目的を欠いた無限の努力(闘争)である」と捉えた。

ベルクソンは世界を、「進化とは持続的な創造の推進である」と捉えた。

ベルクソンの言う「創造」を支えているのは何か？と考えた時、
「創造」を支えているものこそ、「究極の目的を欠いた無限の努力(闘争)」にあるのだ
ろうと思える。

意志の絶え間ない闘争が、絶え間ない創造を生む。

つまり、この世は意志の働きによる無限の闘争による創造の場であり、
それが世界の本質であると思う。

そして創造は「快」を生み、闘争は「苦」を生む。
快と苦は、常に表裏一体なのである。

「創造」を選んでひたすら闘争の場に身を投じる生き方が正解なのだろうか？
それとも、「闘争」という苦の連鎖から脱するために、「意志」の消失に努める生き方
をするのが正解なのだろうか？

どちらの生き方も正解であるように思える。
どちらの生き方を選ぶかは個人の自由である。

仏教で言う解脱とは、この闘争の場からの離脱であり、
解脱そのものが生命の普遍的な目的ではなく、あくまで「創造の場を選ぶか？」それと
も「そこからの解脱を選ぶか？」という、単に「生き方の違い」でしかないのではな
いか？とそう思う。

解脱とは、プロティノスの言うところの「一者」との融合であり、創造とは「一者」が多様性
を創造する行為である。

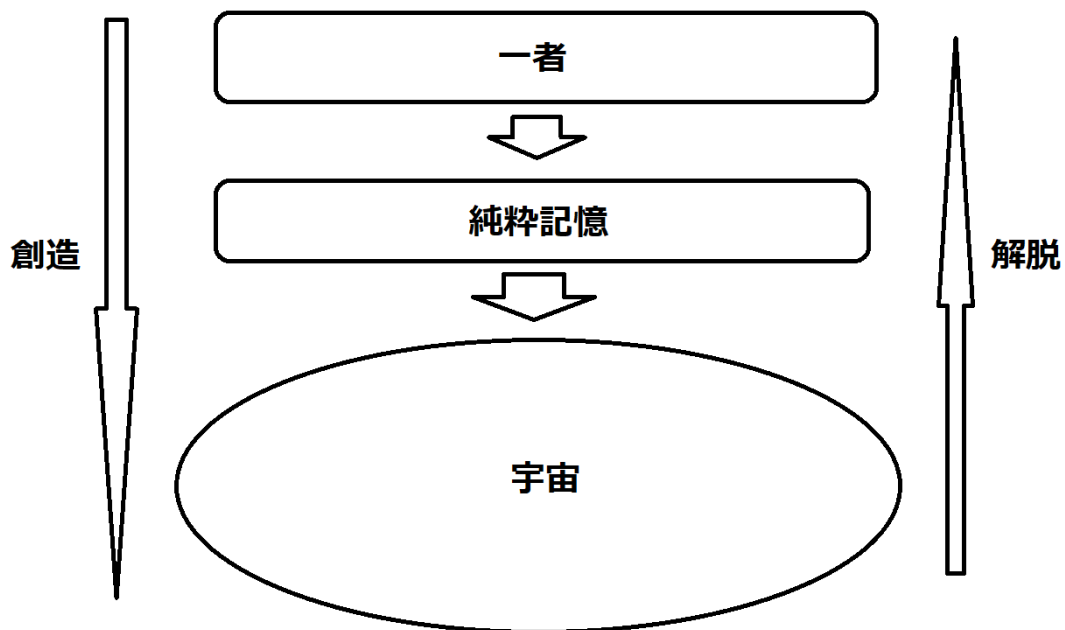
そして「創造」を支える闘争の場に身を置く生き方を、孔子は儒家として説き、「闘争」の場に参加しない生き方を、老子は道家として説いたのだろう。

生き方に正解は無く、どちらの生き方も正解である。

仏教の言葉で言うなら、涅槃に入る生き方をするのも正解であり、輪廻転生の場に留まり続ける生き方をするのも正解なのかもしれない。

強いていうならば、そこで出てくるのが「中道」という生き方なのかもしれない。

そして、生き方の実践において何よりも大事なことは「適切な環境」に身を置くことである。



【補足】

～補足1～

論理的に「世界」そのものを語ることはそもそも不可能である。
無限後退… の先に何があるのだろうか… 語ることはできない。
「一者」というのは、そもそも存在をも超越した存在であり、
人が知覚することも想像することも不可能な存在。
証明することも不可能であり、永遠に謎なままであろう。

一者には、「形相(イデア)」が含まれており、「全ての可能性」がその中には含まれている。
純粹記憶には、これまでのあらゆる生命の全記憶が蓄積されている。

「まだないものの予期」をするために、脳は純粹記憶からの記憶を引き出してくる。
その一連の意識の流れが「創造」である。

～補足2～

スピリチュアルの言う魂とは、ベルクソンの言う「持続」である。
魂にあえて目的を定めるなら、魂の目的は「創造」であり、絶え間ない無限の創造である。
創造し続けるのも自由、涅槃に入るのも自由である。

人生において「悔いのない人生」を送れた者は、涅槃に入るのだろう。
言い換えれば、この世に念を残さない人生を送れた者が、涅槃に入れる。

～補足3～

プロティノスの言うところでは、一者は「ヌース質料」を流出させ、「形相」を与えるとあるが、
ヌース質料は、物質世界にある素粒子そのものと捉えて良いのではないだろうか。

我々の意識は、「質料」と「形相」が合わさって初めて意識として存在できるのであり、
形相は意識そのものではないのかもしれない。

一者の中にある形相は、「過去から未来まで」の宇宙の全歴史の可能性がそこにはある。

だが、質料と合わさっていない形相は、一者の中にだけ存在し、非存在なので実在はしない。

質料と形相が合わさることで、可能性が現実化し、現実化した経験(質料と形相が合わさったヌース)が純粹記憶に蓄積されていくのであろう。

ゆえに、可能性としてすでに未来は決定しているが、現実としてはまだ存在していないというタイプの決定論的世界であると思われる。

～補足4～

ゴットフリート・ライプニッツというドイツの哲学者がいる。

彼の哲学は「モノアド論」と言われている。

場は「モノアド」というそれ以上分割不可能な存在で満たされており、

全ての存在は、モノアドが集まることで創造されている。

そして、個々のモノアドには全ての表象を可能にする全ての情報を持っており、

神に可能な最善の世界が、モノアドによって予定調和で表出されている。

このモノアド論を踏まえて考察すると、

神は一者と捉えることができるから、一者には宇宙の全情報が含まれているということになり、また一者から流出した素材にも全情報が含まれているということになる。

そして世界は、神によって事前に「予定調和」として設計されているのである。

そしてこのモノアド論は、重力理論と量子力学を統合する可能性のある「ループ量子重力理論」と非常に似た概念であると言える。

ループ量子重力理論は、時空の量子化であり、最小単位の量子が相互作用することにより時空全体が表象する「スピンネットワークによる表象」である。

そして、その量子には「全てのパターンを表現する情報が備わっている」とされている。

～補足5～

ドイツの哲学者イマヌエル・カントは、認識論におけるコペルニクスの転回をもたらした。カントのテーマは「アприオリな総合判断はいかにして可能か？」であった。そして、カントの言う「アприオリ」な原理を、スイスの精神科医・心理学者のカール・グスタフ・ユングは「集合的無意識」として発見したのである。

元型という全人類共通のイメージがあり、シンクロニシティとは元型が表層世界に出現した事象のことであり、それが集合的無意識というアприオリの根拠となる。

アンチノミーについて、

1:時空に始まりがある or 始まりはない

この両者を止揚する考えは、

「時空の存在する世界」と「時空の存在しない世界」があり、「時空の存在しない世界」から「時空の存在する世界」が生まれた、ということになるのではないだろうか。

時空の存在しない世界をプロティノスは「一者」と呼び、一者から「時空の存在する世界」が生まれた。

一者には、時間という概念や空間という概念が存在しないので、始まりも無ければ終わりも無い。

2:分割不可能な原子から構成されている or そのようなものは存在しない

これは、「時空の存在する世界」は、分割不可能な原子から構成されており、「時空の存在しない世界」は、原子という概念も存在せず、全てが全一である、と解釈することができる。

3: 自由意志はない or ある

これは、「時空の存在する世界」側から見たら「自由意志は無い」という結論に至るが、「時空の存在しない世界」側から見たら「自由意志はある」という結論になるのではないだろうか。

つまり、一者の視点から見たら自由意志はあり、一者から生まれた現実世界側から見たら自由意志は無いということになる。

4: 神は存在しない or 存在する

これは、「時空の存在する世界」から見たら「神は存在しない」となるだろう。だが、「時空の存在しない世界」から見たら、その世界そのものが必然的存在であり、一者は神そのものであると考えることができる。

～補足6～

ドイツの哲学者マルクス・ガブリエルの著作『なぜ世界は存在しないのか』に書かれていることは真理に近いように思える。

～補足7～

宇宙論について、ロジャー・ペンローズの提唱した「共形サイクリック宇宙論」を支持する。

「宇宙の始まりと終わりは同じである」という主張であり、ゆえに時間に始まりも終わりも無いことになる。

宇宙の終焉と同時に、時間そのものが宇宙の始まりに戻るようなイメージである。

ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェが提唱した「永劫回帰」の哲学にも通じる宇宙論である。

ペンローズは、質量の持たない粒子は「時間がない」ため、一瞬も永遠も同じであると語っている。

そして私は思う。精神だけの世界に質量は存在しない…と。

～補足8～

一般相対性理論を基に組み立てられた理論として、「ブロック宇宙論」という仮説がある。

この仮説は、時間の非実在性を説いたことで知られるイギリスの哲学者ジョン・マクタガートの考えを発展させて誕生した仮説である。

この仮説によると、宇宙の過去から未来にかけてブロックの中に全て実在しているということになる。

もしこのブロック宇宙論が正しいとするならば、このブロック宇宙は「一者」から見た宇宙の姿ではないだろうか。

一者という時間も空間も無い世界の視点から見ると、宇宙はブロックのように過去から未来まで宇宙の全時間が存在しているように見える。

そして、我々宇宙の中にいる側の人間の視点から見ると、時間の流れが存在し、未来はまだ存在していないように見えるのだろうと思われる。

【「世界は意志の無限な闘争と創造の場である」の意味】

私が題名として考えた、「世界は意志の無限な闘争と創造の場である」の意味を考えると、

世界の創造というのは、言うなれば、「物理法則」と「進化論」が語るような進化の法則による宇宙と生命の進化を、「意志の闘争による創造」という表現に変えて語っただけの話である。

それに＋「純粹記憶」という概念を足して、宇宙の外の空間には「一者」という概念の世界があると語っているだけの話なのである。

世界に目的は存在せず、ただ物理法則と進化論の進化の法則による、無限の創造があるだけなのである。

その、物理法則による万物の創造は、オランダの哲学者バールーフ・デ・スピノザが語るような神、つまり「一者」による創造であると言えるのである。

そして、宇宙はニーチェの言う永劫回帰のように、ペンローズの提唱した共形サイクリック宇宙論の世界のように、歴史が繰り返されているのである。

このような舞台の世界の中で我々は、「自由」に一者の創造に参加することが生きるということである。

つまり、この世界は「神秘主義」的な視点からでも、「唯物論」的な視点からでも、どちらからの視点でも解釈できるように成り立っている世界であるのだろうと、私は思う。
強いて言うなら、どちらも真理であり、どちらも正しいのだろう。
視点の違いであり、生き方、解釈の違いにすぎない。

この世界は、「自由」に意味を設定できるようにできているのである。

【補足2】

～補足9～

アメリカ出身ニール・ドナルド・ウォルシュ/著『神との対話』
書かれている内容に、凄く真理が含まれていると感じた。

まさに、現代の聖書と言っても過言ではない。

～補足10～

地球全体の生態系は、生物的環境と非生物的環境との関係性によりバランスが保たれている。

生態系は、長年の生物の進化の中で形成されていった結果の現在のバランスであり、復元力の範囲内であれば生態系は維持されるが、復元力を超える影響を受けると、長年の進化の中で形成されてきた生態系そのものが破壊され、変化する結果となる。

我々人間のような食物網の上位に位置する動物は、他の生物たちの食物連鎖の関係性の上で成り立っている存在であり、
生態系が破壊されるということは、我々人間そのものの存在も脅かされる結果となる。

ドイツの哲学者ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルの言葉を借りるなら、絶対精神の自己展開は、自由の創造に向かう展開であり、
おそらくであるが、我々魂の進化も絶対精神の自己展開の流れに沿った進化を辿っているのだろうと思われる。

その上において、魂の自己展開の末にたどり着いた我々人間が意識すべきことは、「我々人間は、生態系全体によって支えられてる存在なのだ」ということを自覚することである。

我々人間に求められていることは、まさにこのことであり、これを克服できた先にさらなる絶対精神の自己展開はあるのだろうと思われる。

～補足11～

ドイツの芸術家ヨーゼフ・ボイスという人物をほとんど知りませんが、どんな人物であれ語った名言そのものには真理を含んでいると思われるので、ここで引用させていただく。

彼は「人間の行う活動は労働であれ何であれすべて芸術であり、すべての人間は芸術家である」と語ったそうです。

自己実現というのは、人生において「どんな人生という名の芸術」を創っていくか？ということなのでしょう。

～補足12～

その「人生という名の芸術」を創造していくモチベーションは、「強い感情」がもたらす。

幼い子供は、遊びに夢中になったり、ゲームに夢中になったりします。

それは、彼らの中で「強い感情」がそこに働いているからなのです。

「強い感情」が行動を引き起こす。

そして、大人になっても例外ではない。

大人になっても、自分の人生の方向性を決めるのは、それに対する「強い感情」である。

勉強の知識や仕事の能力は、人々の感情を動かすための手段であり、人間の活動の基本は「感情」にある。

【自分らしい生き方をするために】

ユング心理学は、自分らしい生き方を送るためのヒントとなる。

ペルソナ

- ・社会で生きる上で人は役割、立場に合わせた仮面を被る
- ・仮面の振る舞いが個人そのものの振る舞いとなると日常生活に悪影響である

影(シャドウ)

- ・人の性格には二面性がある
- ・実現しなかった本来の自分
- ・自分の認めたくない自分

タイプ論

- ・人間の傾向を8つに分類
- ・2つの態度、4つの機能

コンプレックス

- ・衝動や欲求が無意識に混ざり合って形成された観念の複合体

元型(アーキタイプ)

- ・全人類で共通のイメージ
- ・世界中の神話や物語の共通性

集合的無意識

- ・過去の人々の無意識も繋がっている
- ・統合失調症患者の妄想がある古代祈祷書と共通する

社会生活を送る上で普段被っている「ペルソナ」と、「本来の自分」が解離することで、精神的問題が起こる。

この時に出てくるのが「影(シャドウ)」である。

影(シャドウ)は、実現しなかった「本来の自分」

そして、それにより無意識の中で成長した「コンプレックス」は、やがて日常生活にも支障をきたす。

影は、夢を通じて SOS を出してくる。

「元型(アーキタイプ)」と影というトラウマが合わさって、それが夢となって現れる。

つまり、夢から元型を除いて考えてみると、自身のトラウマに気付くことができる。

この影を自覚して、現在の自分と統合することで、精神的問題は解消する。

また、アニマ・アニムス(抑圧された自分の異性性)という概念もあり、抑圧されたアニマ・アニムスを認識することも、精神的問題の解消に繋がる。

無意識の領域に偏った心的エネルギー、無意識の中にできた「コンプレックス」に絡めとられた心的エネルギー

無意識の領域に偏ってしまった心的エネルギーを意識の領域に戻すことが、自己実現に繋がってくるのである。

※そのための方法として「創造的退行」がある。

(自我を一時的に発達段階の初期に戻すこと)

このような無意識に抑圧された自分に気付くことが、自分らしい人生を送ることに繋がると思われる。

ニーチェは「超人」になるためには、3つのステップがあると言った。

第1ステージ:ラクダ

第2ステージ:獅子

第3ステージ:幼子

自らの創造力に身をゆだね、勝手に自由気ままに遊ぶ。

まるで幼い子供のような無邪気な精神。

それこそが最終段階であり、超人である。

ニーチェの言う「超人」とはまさに、ユングの言うペルソナを取り払い、影(シャドウ)を自覚しそれと統合した「本来の自分」

それこそが、ニーチェの言う「超人」なのだろうと思われる。

【補足3】

～補足13～

進化論における自然選択説というのは、「環境に最も適した者が生き残る」という進化論である。

この理論だけでは自然選択の結果、分子レベルでも同じような特徴の個体だけが自然選択で残るはずである。

だが、実際はそうではない。

中立進化説においては、自然選択の影響が及ばない中立な突然変異があり、その中立な変異による多様性が、外見上同じ個体同士の中にもあるということになる。

環境の影響を直接受ける自然選択と、環境の影響以外による運で生き残れる中立進化の、両方の働きにより進化は起こったとされているのである。

つまり、ここから何が言えるのかと言うと、

生物は、外見上の遺伝子の多様性だけでなく、外見に影響を与えない範囲の遺伝子レベルでの多様性もあるということである。

多様性こそが、生物の本質であり、多様性こそ大事であるということである。

社会的に決められている「男性像」や「女性像」

これが全てなのでしょうか？

ジェンダーフリーという言葉があります。

多様性こそ生物の本質なのであれば、生き方や考え方に多様性があっても良いと思います。

生物というのは、強い者だけが生き残るわけではありません。

環境に適した者だけが生き残るわけではありません。

多様性の中で複雑に絡み合って、生物というのは成り立っている。

全ての多様性を認め、生物全体で進んでいくことの中に、個人の人生の意義も見出せていけるのだらうと思われます。

～補足14～

環境が自然淘汰を生み出し、地球各地の環境の違いが進化による生物の多様性を生み出した。

それぞれ違う環境において、淘汰される個体もまた違ってくる。

とすれば、人間社会においても、それぞれの環境においてその個人の「適した環境」「適さない環境」というのがあるわけで、
普遍的な強者や弱者、普遍的な適者や不適合者というのは、存在しないのではない
か
と思います。

もし今置かれてる環境が、自分に適さないのであれば、「自分の適した環境」に移れば
良い。

「この環境以外どこも自分の居場所がない」という固定観念が、人生の窮屈さを生み出
す。
環境が生物の多様性を生み出すのであれば、自分の置かれてる環境を変えれば良
いのである。

だが実際にはそう簡単にはいかなく、
特に古代においては移動手段も無く、閉鎖的な空間で限られた生活環境の中で生き
ていくしかなかったのかもしれない。
そこで古代において登場してきたのが、宗教であり、出家という制度であるのかもしれ
ない。
さらに、その中で自分たちに合った環境を宗派という形でどんどん生み出していった
のかもしれない。

いずれにしても、
『普遍的な強者や弱者、普遍的な適者や不適合者というのは、存在しない』
『今置かれてる環境が、自分に適さないのであれば、「自分の適した環境」に移れば良
い』

～補足15～

娯楽とは何か？ 生きるとは何か？

と考えた時、

「外に出て自然の恵みを感じる」ことの中に、その意義を見出すことができるのではないかと思います。

娯楽についていくつかピックアップしてみると

- ・文学
- ・ファッション
- ・音楽
- ・演劇
- ・美術
- ・造形
- ・食
- ・運動

主にこれらが挙げられる。

実はこれらの多くに「原始宗教」的な起源を見出せるのではないだろうか。

文学は古代は、口承文学であり、

文字の無かった時代においては、口頭のみで物語が後世に伝えられてきた。

それは民族間の物語であり、民族の物語はその民族の宗教性が表れている。

ファッションの起源も、民族衣装といったところに見出すことができる。

音楽の起源も、民族音楽に見出すことができ、その民族の宗教性を表す方法でもあった。

演劇の起源も、儀式・儀礼といった宗教行事にまで遡ることができる。

美術の起源は、洞窟壁画にまで遡ることができ、宗教性のある壁画もその中には含まれている。

造形(道具以外の芸術という意味での)の起源は、その民族における民族装飾や偶像崇拜にあるように思われる。

これら芸術の起源には、原始宗教にまで遡ることができ、
原始の宗教におけるテーマは主に「自然崇拜(アニミズム)」であった。
自分たちの生きる場そのものである自然に感謝し、自然の恵みの中で自然と共生しながら生きていく。

食は自然からもたらされ、狩猟採集や農業をする上で体を動かすこと(運動)は不可欠である。

つまり、あらゆる物事は「外に出て自然の恵みを感じる」ことの中に、その意義を見出すことができるのだろう。

もし今人生に行き詰っていたとしたら、外に出て自然の恵みを感じてみると良い。
生物本来の喜びを感じることができるであろう。

～補足16～

人生とは、想起である。

「やりたいこと」の無い人間はあまりいない、
みんな心の奥底には、自分の本当のやりたいことが眠っていると思われる。
だが、生きていく中で「本当のやりたいこと」を抑圧して生きていき、その中で自分のやりたかった本来の目的を見失って、自分自身もいつしかそれ自体を忘れていき、わからなくなっていくものである。

無意識の中には、自分の本来の欲求、抑圧された「本当のやりたいこと」が実はある。

それを思い出していくことが「想起」であり、
「想起」の連続により「創造」は生み出されていく。
それが生きるということなのだろう。

【自説：一者との合一は不可能である】

一者との合一は不可能である。

一者は、常に持続を創造する存在を超えた存在であり、
存在を超えた存在であるため、我々存在する者が一者と合一することは不可能である
と思われる。

では、仏教の言うところの「涅槃に入る」とは、どのような状態を指すのだろうか？
おそらく涅槃に入るとは、宇宙そのものの持続（つまり宇宙靈魂）と合一することである
のではないだろうか。

ショーペンハウアーは、意志が表象として姿を表す際には段階があると言った。
この段階をアイデアとして表現し、自然法則を低位のアイデアとし、植物、動物を経て、人
間を高位のアイデアとした。

私が思うに、このアイデアの段階は「創造」の段階であると思われる。
高位になるほど、より精錬された創造の賜物である。

創造は、意志の闘争により生み出されていくものであるため、創造と意志の闘争は常
にセットになっており、涅槃とは程遠いものである。

ゆえに、自然法則等の低位のアイデアになるほど、涅槃に近い存在であると言える。

つまり、「涅槃に入る」とは、低位のアイデアに生まれ変わることはないだろうか。

生態系の食物連鎖において、生産者、一次消費者、二次消費者とある。

二次消費者は、より精錬された創造を持続させるために、一次消費者を捕食すること
による莫大なエネルギーを得る必要がある。
まさに意志の闘争による創造である。

人間は特に、創造的欲求を常に追い求める存在であり、人間は「創造の究極体」であ
ると言える。

ゆえに、最も煩惱の強い生き物は人間であると言える。
と共に、最も煩惱と無縁の生き物は「生産者」や「分解者」であると言える。

つまり、生産者や分解者といった、低位のアイデアの生き物であればあるほど、涅槃に近い生き物である。

宇宙靈魂(宇宙の持続)との合一が、涅槃に入るということであり、一者は、常に創造を生み出す存在を超えた存在である。

【補足4】

～補足17～

『一者との合一は不可能である』に記載した >生産者や分解者といった、低位のアイデアの生き物であればあるほど、涅槃に近い生き物である。 を考えると、原始宗教や世界各地の神話の形態である「自然崇拜」が、真理に近い信仰の形態であると考えることができる。

～補足18～

ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの「死への先駆」をヒントに、私自身の感じたこの世界の真理を説明したいと思います。

仏教の阿毘達磨の哲学によると、時間は「未来から過去へ」流れているそうです。

これはどういうことか？

つまりこれは、こういうことである。

将来の最終地点には「一者(神)」があり、
「一者(神)」は非存在である。

そして一者は、将来の可能性を形相(アイデア)として生み出す。

この形相もまだ非存在である。

この形相の性質は「時間」である。

別名「持続」である。

そして、この形相は物理空間と接した時に初めて存在となる。

物理空間は無時間性であり、形相を存在として現在に現出させるためのディスプレイみたいなものである。

物理空間は、ただ静的に留まっているだけである。

そこに、時間の性質である形相が「未来から過去へ」移動する。

物理空間側から見れば、過去から未来に物理空間の時間の流れが進んでいるように見える。

未来から過去へ形相が移動することにより、物理空間に接した形相が現在として現出する。

すでに現出した存在は、既在として純粹記憶に保存される。

この一連の流れが、時間は「未来から過去へ」流れているという意味である。

このように考えることができました。

～補足19～

古代ギリシャの数学者・哲学者のピタゴラスは、「宇宙は音楽を奏でており、それがこの世の調和をもたらしている」と語った。

※宇宙の奏でる音楽を「天球の音楽」と呼んだ。

また、ピタゴラスの影響下にあったプラトンは、「音楽は宇宙の調和だけではなく、人間に調和を与え、魂が救済される」と語った。

16～17 世紀のドイツの天文学者であるヨハネス・ケプラーは、著書『宇宙の調和』の中で「惑星の動きには音楽的な調和がある」と主張した。

つまり、ここからわかることは、
宇宙の本質は「音楽のような調和」であり、これはベルクソンの言う「持続」という概念にも繋がってくる。

宇宙の奏でる音楽を「天球の音楽」とピタゴラスが言ったように、プロティノスの言うところの一者は「天球の音楽」を創造する“存在を超えた存在”であると言える。

我々生物の存在は、この天球の音楽を構成する1つの楽器のようなものであり、この1つの楽器の生み出す持続が「魂」なのであろう。

私の自説ではあるが、物質や、植物、分解者といったショーペンハウアーの言うところの低位のアイデアになるほど、天球の音楽の基礎となる土台を構成しており、これらの存在が奏でる音楽は、天球の音楽の本質に近いのかもしれない。

我々のような高度な生き物になるほど、独自性を持った音楽を奏でようになり、独自の世界観へ派生していくのだらうと思われる。

～補足20～

仏教の「曼荼羅」(両界曼荼羅－金剛界曼荼羅、胎蔵界曼荼羅)には、真理が描かれている。

～補足21～

我々が、「何も知らない無知な状態」でこの世に産まれてくる理由は、『そのほうが幸せだから』なのかもしれない。

【真の人生の目的】

ハイデガーは、『形而上学の根本諸概念』の中で、「虚しさの3段階」を説いている。

- ・手持ち無沙汰の虚しさ
- ・パーティーの後、自宅で机に向かう虚しさ
- ・根源的な虚しさ

このうち、最も重大なのは「根源的な虚しさ」である。

そして、この深い虚しさに目覚めることが大事だとハイデガーは言っている。

では、なぜ根源的な虚しさを抱えるのか？

それは、「何のために生まれてきたのか分からない」からだという。

ニーチェはこう言っている。

「何のために生きるのか？ 一切は空しい！

人生——とは、からっぽの麦わらをたたいているようなものだ。」

『ツァラトゥストラはこう言った』より

参考：<https://true-buddhism.com/teachings/emptiness/>

世界の本質は確かに「世界の創造」だ。

だが、創造的欲求が極限まで行った先にあるのは「根源的な虚しさ」である。

極限まで創造的欲求を出し尽くした者が行きつく「根源的な虚しさ」

この境地に達した時に真の人生の目的が見えてくるのかもしれない。

それは、仏教に説かれている人生の目的であり、「涅槃に入る」ことなのかもしれない。

【自説:人生の3段階】

人生の3段階

- 1、自分の欲求を極限まで追求する
- 2、極限まで追求した結果、根源的な虚しさという壁に突き当たる
- 3、仏教の真理に気付き、悟りへの道を歩む

※究極的には仏教でなくても良い(補足にて後述)

人生の目的は、
「極限まで創造的欲求を追求し、元の故郷である涅槃に帰還すること」である。

我々は、創造活動をするために故郷である涅槃からこの世に分離して来た。

創造活動というこの世での目的を達成した後、我々は元の故郷である涅槃に帰還するのである。

※涅槃⇔天国と置き換えても良い

【補足5】

～補足22～

「仏教の真理」と、仏教推しで書いてみたものの、究極的にはなにも仏教でなくても良いのかもしれない。

自分にとっての、わかりやすい馴染みやすい教えがたまたま仏教であっただけの話であって、真理というのは究極的には「宗教や哲学の垣根を越えたもの」なのかもしれない。

アンリ・ベルクソンは、晩年キリスト教のカトリックを信仰した。
キリスト教にも、仏教と同等に真理が説かれていると私は思う。

【相対主義 or 絶対的真理？について】

相対主義である「人それぞれ」というのは思考停止に陥る危険性がある。

だが、絶対的なものがあると決めてしまうのは独断のドグマに陥る危険性がある。

哲学というのは、知を愛するが語源であり、探求に終わりは無い。

これが真実だと思ったことも、容易にひっくり返ることがある。

長らく天動説が絶対的真理だと思われてたが、実は地動説が正しかったのように。
(でも、地動説が真理だとも絶対的には言えない)

どんなに普遍的な真理があると思っていても、それはいつか容易にひっくり返る可能性はある。

それが正しいと考えたら、正しいと信奉しない人を否定せざるを得ない。

絶対的な真理があるのか？ないのか？

それはやはり人間が判断できることではないのかもしれない。

哲学を学ぶということは常に、不満足であるということ、欠けているということを意識して、それについて向き合っていくこと。

それが哲学であるのだろう。

ネオ高等遊民:哲学マスター

https://youtu.be/x1SL2uAE_LY

こちらの動画でこのことを学びました。

真理はやはり存在しないのかもしれない。人間が知ることは不可能なのかもしれない。
いつ私はこのことを受け入れられるのだろうか。

本当の悟りとは何か？ お釈迦様が真に言いたかったことは何だろうか？

お釈迦様の「無記」がヒントになるのかもしれない。

常見、断見といった悪見につながることをお釈迦様は、無記として回答・言及を避けた。

このことは、つまり、「相対主義」「絶対的真理」この二元論に囚われるなと言っているの
だろうか。

【世界は存在せず、無数の意味の場だけが存在する】
ドイツの哲学者マルクス・ガブリエルはこう言う。

「世界は存在せず、無数の意味の場だけが存在する」

つまり、ここからわかることは、
存在しない世界から無数の意味の場という存在世界が現れる、
これが「世界」であるということなのだろう。

そして私はこう思った。

物理法則に支配された宇宙という意味の場があり、
明晰夢にあるように、物理法則に支配されていない世界という意味の場もある。

神との合一という目的を持った意味の場もあり、
ひたすら無限の創造を目的とする意味の場もある。

ありとあらゆる意味の場という多元世界が存在し、我々意識を持った現存在は、その多
元世界を渡り歩く存在であると言える。

もしかしたら、これが世界の構造なのかもしれない。